

废墟

崩壊の废墟を逍遥して
新たな地平が見通せることに気付く
それは何も世界戦争の後だけではない

かつてそこにあったもののかすかな気配
熟しきった果実が地面に落下して散らばっているかのような
濫費であり、無為であり、また模索であるもの

人類を支配しつつあったランダムなシステム群は
废墟となった都市の底深くに巢食い
姿無きままに、新たな摂理の座を再び企む

同時に、行き場を失ったエクスタシーは
亡者として、ふらふらとさまよい
宿主となるべき者をあてどなく捜し求める

直線と、数学的曲線が崩れてゆく その中で
わずかに、慄えながら腕を伸ばし
やっとなこと、しがみついて残っている意思

それを不気味に待ち受ける者の視線
それが無数に、3次元的に交叉している
あたかも蜘蛛の巣が獲物の振動をじっと待ち受けるように

無秩序であることの閉塞感に覆い尽くされ
恐怖に対抗するために研ぎ澄まされた狂気は
己自身についての生命感覚を麻痺させてゆく

獲得すべき自由は存在せず
ただただ、決して制止されることのない
闘争と狡知が跋扈するばかりだ

自ら蛍光を発し、点滅する者に近付いてはならない
彼らは、星などではない
喰う者を誘引しているのだ

空洞と化した創造物の群れは、今や

新たな緊張に満たされており、同時に
あらゆる希望を、そして社会性を拒絶している

これほど見晴らしがよければ
一度経験した歴史のとおりに進捗するだろうと
容易に想像できようものだが・・・

創造者は姿を隠しているのだろうか
それとも完全に死滅してしまったのだろうか
創造物どもが嗅ぎ回っている創造者は

(2009.4.26)